

みんなのかまくら

学校法人支倉学園 めるへの森幼稚園（宮城県仙台市） [4歳児]

<活動前の様子> 雪が積もった日、S児が友達を集めて“かまくら作り”を開始した！みんなでどこに作るか相談し、影の多い裏庭にかまくらを作ることにする。「まずは大きい山を作るんだよ」と言い、幼児たちはそれぞれシャベルを持って「砂場でお山作ってるみたいだね」と雪山を作り始める。

<幼児の姿と保育者の関わり>

T…保育者 C…子ども

かまくら作りに挑戦



- ・周りの雪がなくなると、そこに雪を入れて運び、雪山を大きくしていく。
- ・途中、何度も「そろそろ穴掘ろうよ～」と言う幼児がいて、穴を掘ることにする。
- ・穴を少しずつ掘っていくと「かまくらになってきた！」と大喜びする。
- ・入ろうとするとお尻しか入らず、「小さいね」と少しがっかりしている様子。
- ・翌日かまくらを大きくしようとみんなで裏庭へ行くと、雪がほとんどない。
- ・子どもの考えを活かし、隣の“風の子公園から雪を運ぶ”ということに決定する。

溶けないように雪を集めよう！



- ・段ボール、紙袋、ビニール袋、プリンカップなどの意見が出る。タライはどうかという子どもの提案にみんなが納得する。

T：「タライはいっぱいあるよ！大きいけど大丈夫？」

C：「グループで一つのタライにして、グループのみんなで運べばいいよ！」

C：「あっ！お日様の光が当たると溶けちゃうから、蓋をしないと！」

C：「段ボール？」 C：「だから、段ボールは水に弱いんだよ！」

「サランラップか、キラキラの紙（アルミホイル）？」

T：「どっちにしようか？目の所に当てて、暗くなれば光が通らないってことだよね」
幼児たちは順番に、サランラップとアルミホイルで目隠しをして試し「アルミホイルの方が光にあたらないと思う！」という意見にまとまる。



- ・風の子公園につくと、子どもたちは「やっぱり雪がいっぱいある！」と喜んで、タライに雪を入れ始める。

- ・幼児同士で教え合いながら雪を集める。タライがいっぱいになり、予定通りアルミホイルで蓋をして「こっち持つから、〇〇くんはそっち持って」と、みんなで力を合わせて雪を運ぶ。

かまくらを大きくしよう



- ・前日に作ったかまくらに、運んできた雪をひたすら付ける。
- ・前日にかまくらを作っていた幼児が、「穴を掘るのは、雪を全部付けて大きくなってからじゃないとダメだよ」と周りの幼児に教える。
- ・運んできた雪を全て付け終わりと、穴を掘ると、子ども一人がすっぽり入る位のかまくらができ、どの子どもも「やった～！」「できた～！」「大変だったけど、楽しかった！！」「みんなで作るとすごいね」と、でき上がった喜びを感じている。その後、何度も裏庭へ足を運んでかまくらに入った。

<考察>

- ・時間がかかっても幼児自身の考えや思いを大切にし、幼児が主体になって活動を進めていったからこそ、失敗した時の悔しさや成功した時の喜びが大きかったものと考えられる。
- ・いろいろな気持ちを味わいながら、みんなで目的に向かって頑張った経験から、友達と力を合わせることの楽しさや大切さを感じられたことが、“またやりたい”という次への意欲につながったと思われる。
- ・幼児の考えの基となっているのは、それまでの霜柱集めや雪遊びなどの経験から学んだことである。様々な気づきや発見を友達と共有できていたため、話し合いの場面でも想像を膨らませての活発なやりとりとなり、それが、主体的な取り組みにもつながった。

みどころ 冬の自然に主体的に継続して関わったからこそその子どもたちの発見や気づきがあり、保育者は大切に受け止め、自分たちの力で目的が実現するような援助をしています。雪に関わることで、雪の性質や雪と日射しとの関係などに目を向け、考えたり試したり、雪の冷たさ・重さ・溶ける様などを体全体で感じたりする経験は、「科学する心」の育ちにつながることが期待できます。